

イングランドにおけるガーデン・ヴィレッジとガーデン・サバーク

橋 詰 直 道

I. はじめに

E. ハワード (Ebenezer Howard) が、近代都市計画に大きな影響を与えることになった「明日一真の改革への平和的な道」という本 (Howard, 1898) を著して100年が経過した。1902年には一部改訂され、「明日の田園都市」として出版されたこの本の中でハワードは、都市と農村を融合させた新たな田園都市、ガーデン・シティ (Garden City) の建設を提唱した (注1)。ここに始まる田園都市運動は、レッチワース (Letchworth) の建設へと発展することになる。このガーデン・シティは、イギリス国内だけでなくヨーロッパや日本の住宅地開発にも大きな影響を及ぼすことになったが、ハワードの田園都市論は、19世紀にイギリスで建設された工業村 (industrial village) の建設理念やその開発手法と深く関わっていたことが知られている (Sutcliffe, 1981 ; 片木, 1988 ; Hall, 1988 ; 石田, 1991 ; 石川, 1999など)。

工業村の中には、ガーデン・ヴィレッジ (Garden Village) と呼ばれ、後に田園都市運動やガーデン・シティ、ガーデン・サバーク (Garden Suburb) の開発へと展開されることになる住宅開発のモデル村となったボーンヴィル (Bournville) やポート・サンライト (Port Sunlight) が含まれている。また、レッチワースの建設とほぼ同時期にロンドン郊外にハムステッド・ガーデン・サバーク (Hampstead Garden Suburb) が建設された。この頃から、各地にガーデン・シティやガーデン・ヴィレッジあるいはガーデン・サバークの名で住宅地が造成された。しかし、本来のガーデン・ヴィレッジまたはガーデン・サバークと呼べる住宅地は限られているし、今日でも、これらの用語の使われ方に混乱がある。さらに、「最初のガーデン・サバークは何処？」という視点での議論 (Hall, 1992 ; 1996 ; 1999など) の結論は出ていないように思われる。

本稿は、こうした視点に立って、ガーデン・ヴィレッジとガーデン・サバークを中心にそれらの事例を基にその住宅地の意味するところを整理すると同時に、「最初のガーデン・サバークは何処？」という議論に、新たに候補地を加えて再検討しようとしたものである。なお、イギリスにおける工業村や田園都市運動を見る場合、ユートピア思想やその時代の社会・経済的背景をぬきには語れないが、この点については本稿では特に言及していない。なお、ここで取りあげた工業村を含む事例は、実際に筆者が1999年に訪れたイングランドの住宅地を対象としている。また、ガーデン・シティについては、その概念も明確で既に多くの研究成果があるこ

とから（注2）、それらの事例をあげて検討することはしていない。

II. ガーデン・ヴィレッジと呼ばれる住宅地

産業革命以降、世界に先駆けて都市への人口の流入とそれに伴う深刻な都市問題に直面することとなったイギリスでは、法律制定や住宅建設などを通してスラムを改良する試みも見られたが、それらは対症療法的なものでしかなかった。一方、都市の空間的な計画と社会・経済的な計画との関係を刷新し、諸問題を一挙に解決してしまおうとする試みもあった。それがいわゆるユートピア思想家の提案したモデル・コミュニティづくりであった。19世紀のユートピア思想家の中で、これを最初に実現しようとしたのはR. オーエン（Robert Owen）であったことは広く知られている（片木，1987：pp. 152-162など）。このモデル・コミュニティが産業資本家によって工業村（Industrial Village）として実現した例は、ヨークシャーのリーズ（Leeds）、ブラッドフォード（Bradford）、ファリファックス（Halifax）を結んだ三角地帯に建設されたコプレイ（Copley）、アクロイドン（Akroydon）、それにソルテア（Saltaire）に求めることができる。これら工業村については、Creese（1966：pp. 13-46）や片木（1987：pp. 152-192）、石田（1991）、高橋（1996：pp. 192-216）などに詳しいので、ここではその名をあげるに留める。

イギリスにおける工業村の最初の完成例（1854-71年）ともいえるソルテア（注3）は、労働者向け住宅を見る限り、当時の一般的な労働者住宅に比べて優れたものであったとはいえ、住宅密度も高いいわゆる社宅団地の域を出なかった（石田，1991；高橋，1996：pp. 197-201）。その意味では、公共オープンスペースと十分な広さの庭を有し、後にガーデン・ヴィレッジと呼ばれることになるボーンヴィル（Bournville）やポート・サンライト（Port Sunlight）、ニュー・イアーズウィック（New Earswick）とは大きくその性格を異にするものである。

1. ボーンヴィル・ヴィレッジ（Bournville Village）

1879年、キャドバリー兄弟（George and Richard Cadbury）は、バーミンガム（Birmingham）の中心部にあったチョコレート工場をさらに拡大するために、水資源と交通条件に恵まれたバーミンガム南西約7kmの郊外に移転し、工場に隣接する土地に住宅地ボーンヴィル・ヴィレッジ（Bournville Village）の建設を開始した（注4）。最初に建設された工場労働者用の住宅は、当時の一般的住宅形式を踏襲したものであった。工場は鉄道と運河に沿った土地に建設し、敷地の中央を東西に流れる小川（Bourn Brook）沿いに公園と男子用グラウンドが、道路を挟んで南側には女子用グラウンドが設けられ、ボーンヴィル・ホールも建てられた。1895年にはJ. キャドバリーは、56haの土地を購入、建築家A. ハーヴェイ（Alexander Harvey）に設計を依頼して本格的に住宅の建設にとりかかった。1900年にはそ

の面積は134ha、住宅は313戸を数えるに至った。この年、彼は住宅地の管理・運営を行うボーンヴィル・ヴィレッジ・トラスト (Bournville Village Trust) を設立し、土地と住宅をこの信託財団に移管した。このような土地の公的所有と管理による開発利益の社会的還元は、後の田園都市構想に大きな影響を与えた (片木, 1988 : pp. 175-182 ; 石田, 1991 ; Creese, 1966 : pp. 108-143 ; Henslowe, 1984 ; Bournville Village Trust, 1995)。

ボーンヴィル・ヴィレッジの計画では、それまでの工場村と違って、従業員だけでなく一般の入居希望者にも住宅を提供したこと、敷地全体に豊富な緑地・オープンスペースを設けたこと、住宅は単調なトンネル・バック形式の長屋ではなく2～4戸建の田園風コテージとしたこと、個々の住宅は前庭をとり、裏庭は菜園や果樹園にしたことなどが特徴である。さらに、既存樹林を住宅地に残すと同時に、様々な街路樹を植栽し、道路にはその樹木名をつけるなど、緑地の保全と創出にも努力した (写真1)。この住宅計画は、敬虔なクエーカー教徒で、労働者の住宅改善に関心を持っていたキャドバリーが考えた出した当時としては画期的なアイデアであった (片木, 1988 : pp. 175-182 ; 石田, 1991 ; Creese, 1966 : pp. 108-143 ; Henslowe, 1984) し、住宅問題を改善し、社会的目的をもった新たな環境デザインによる将来の開発はどうあるべきかを問いかけた点でモデル・ヴィレッジといえよう (Cherry, 1988 : pp. 6-15)。



写真1 ボーンヴィル・ヴィレッジ Bournville Village
(1999年9月8日, 橋詰 撮影)

2. ポート・サンライト・ヴィレッジ (Port Sunlight Village)

「サンライト」の商標で石鹼製造販売に成功したW. レーヴァ (William H. Lever) は、マーザー川 (River Mersey) 河畔の工場では手狭になったため、新たに工場用地をリヴァプール

(Liverpool) の南郊のマージー川対岸に求めた。用地は原料輸入に便利な河川沿いで、製品輸送用の鉄道にも近く、十分な広さの土地が確保できるということで当時は湿地帯であった一角が選ばれた(注5)。1888年に約23haの土地を購入し、そのうち10haを工場用地とし、残りの13haを工場労働者用の工業村用地(その後約56haに拡大)にあてることにし、工場と工場村(ポート・サンライト)の建設が開始された。工場と住宅地の間の土地は、公園・緑地として残され、そこにテニスコートや教会、学校などの公共施設が整備された。また、工場に隣接して女子用食堂や男子用食堂兼用ホールなども建設された(片木, 1988 : pp. 183-192 ; 石田, 1991 ; Creese, 1966 : pp. 108-143 ; Hubbard and Shippobottom, 1998)。

こうして、従業員に緑豊かで健康的な環境の住宅地が建設された。このポート・サンライトの特徴は、敷地規模はボーンヴィルに比べ小さいものの、スーパー・ブロック型開発を採用し、個々の住宅(3~7連戸のテラスハウス)の前庭は、街路樹が植えられた道路に向けて開けた、いわゆるアメリカン・オープン・フロント・システムとなっている点である。さらに、各ブロック内部に囲まれたスペースはアロットメント・ガーデン(分区園)として設計されたことで、各住宅の前後には十分な庭とオープンスペースが確保されている。また、個々の住宅に個性的な特徴を持たせるために30人近い建築家を動員し、農村に伝わるハーフチンバー調の建築様式を基調とするピクチャレクな住宅の設計を競わせたという。こうして、一見建築デザインの展示場のような美しいガーデン・ヴィレッジが誕生することになった(片木, 1988 : pp. 183-192 ; 石田, 1991 ; Creese, 1966 : pp. 108-143 ; 写真2)。



写真2 ポート・サンライト・ヴィレッジ Port Sunlight Village
(1999年10月7日, 橋詰 撮影)

3. ニュー・イアーズウィック (New Earswick)

1901年、クエーカー教徒でチョコレート企業の経営主 J. ラウントリー (Joseph Rowntree) は、ヨーク (York) 北郊の工場で働く労働者用の住宅地を工場から北に少し離れた場所に建設することを決め、その設計を R. アンウィン (Raymond Unwin) と B. パーカー (Barry Parker) に依頼した (注6)。ラウントリーは、週給25シリングの労働者でも入居可能な美しく衛生的な住宅地の建設を目指した。ヨークの中心から5.6kmの場所で、東がフォス川 (River Foss) に接する約61haの土地が購入され、ニュー・イアーズウィックの建設が開始された (注7)。最初に建設されたフォス川沿いの住区には、川の流れに沿った形でポプラ・グローヴ (Poplar Grove) などの道路が建設された。アンウィンは、1戸建や2戸建 (semi detached) よりも長屋風テラスハウスを好んだし、後に建設された西側の住区では、住民のコミュニティ意識の形成にも有効だとの考えから袋小路のクル・ド・サック (cul-de-sacs) を多く配置している。敷地中央には広大なヴィレッジ・グリーンが設けられ、街路樹を植栽すると同時に、ボーンヴィルに習って道路に樹木の名前をつけている。初期の家屋は切妻屋根からなるアンウィン独特のスタイルのコテッジであったが、1910年以降の家屋は、当時流行していたネオ・ジョージアン様式のテラスハウスに変わった (片木, 1988 : pp. 211-217 ; 高橋, 1996 : pp. 208-214 ; Waddilove, 1954 ; Creese, 1966 : pp. 191-202 ; 写真3)。



写真3 ニュー・イアーズウィック New Earswick
(1999年12月7日, 橋詰 撮影)

この住宅地は、オープンスペースを活かした点やクル・ド・サック道路などに特徴があるが、1904年に住宅地の経営を信託財団ジョセフ・ラウントリー・ヴィレッジ・トラスト (Joseph Rowntree Village Trust) に移管した点はボーンヴィルに倣ったものである。ここはアンウィ

ンとパーカーにとって、それまでに彼らが行ってきた労働者用住宅改良の総決算であり、初の田園都市、レッチワースの原型ともなった住宅地といえる。特にアンウィンは、単なる建築家としてではなく、独自の理論をもった都市計画家として登場した点も注目される。当初、工場従業員用の住宅地を目指したという点では、ボーンヴィルやポート・サンライトと同様、工業村の一つであるが、この住宅地が工場から離れた場所に建設されたことは、それまでの工業村とは異なる点で、ヨーク郊外の住宅地という立地上の特徴からは、むしろガーデン・サバークに近いとも考えられる（片木，1988：pp. 211-217；高橋，1996：pp. 208-214）。

Ⅲ. ガーデン・サバークと呼ばれる住宅地

世界に先駆けて産業革命を成し遂げたイギリスでは、都市への人口流入とそれに伴う都市化と様々な都市問題をいち早く経験することになった。ロンドンでは、19世紀に入っても依然として地主による地所の開発が続いていたが、その開発地域は次第に郊外へと広がっていった（注8）。一方、都市内部には労働者階級のスラムが生まれ、中流階級は煤煙に汚染された都市を離れ、郊外の田園地帯に住居を構えるという「田園謳歌主義」が大都市からの離反力として働くようになった（西山，1992：pp. 46-52）。この中流階級の流出を助長したのは急速に発達した鉄道であった。もちろん、中流階級は都市に職を持っているので、その住まいは鉄道を利用して通勤可能な範囲の田園地帯ということになる。ここに「職住分離」という生活様式と、都市と農村（田園）との中間に位置し、都市の利便性と農村の快適性の双方を享受し得る「郊外」つまり、サバーク（Suburb）という考え方が定着することになる（片木，1987：pp. 10-11）。後にサバービア（Suburbia）とも呼ばれるこうした郊外住宅地は、通勤労働者の新たな生活空間として益々拡大していった。

19世紀後半以降、折からの鉄道の敷設に支えられた職住分離が進展し、中流階級の居住空間はさらに郊外へと拡大すると同時に、それまでの地主による開発から新たに投機的デベロッパーの手による郊外住宅地が開発されるようになる（鈴木，1996：pp. 171）。20世紀に入ると、初のガーデン・シティとなったレッチワースの計画思想に基づく郊外住宅地も建設されるようになる。これらの郊外住宅地の多くは、ガーデン・サバークと呼ばれ、あるいは自ら名乗っているものも多い。しかし、どの郊外住宅地がイギリス初のガーデン・サバークか？という点に関しては議論の分かれるところである。ここでは、自称ガーデン・サバークを含めてロンドンにおける代表的な住宅地を4か所紹介する。

1. ベッドフォード・パーク（Bedford Park）

Creese（1966：pp. 87-107）が、「オアシス」と表現し、郊外生活における新たな夢の実現を果たした住宅地で、「ファースト・ガーデン・サバーク」（Bolsterli，1977：pp. 1-8）とも

言われているのが、ベッドフォード・パークである。この住宅地は、1875年にJ. カー (Johnathan Carr) がロンドン西郊のターナム・グリーン (Turnham Green) 駅の北側に9.7 haの敷地を購入して開発した初期の郊外住宅地である (図1)。

カーはまず、建築家E. ゴッドウィン (E. W. Godwin) に住宅の設計を依頼したが、その後N. ショウ (Norman Shaw) に設計を依頼した。ショウは住宅だけでなく店舗や教会などの公共施設も設計した。ここにはベッドフォード・ハウスと呼ばれていたジョージアン調の牧師館があったことが住宅地の名前の起源となっている。もともと、この土地は王立園芸協会庭園長であったJ. リンレイ (John Lindley) の所有地で、住宅地はそこにあった「リンレイの樹木」をできるだけ残すように計画された結果、広い道路と庭が生まれることになった。ショウによって設計された住宅は、クウィーン・アン様式と呼ばれた赤レンガによる独特のものであったことから、ベッドフォード・パークは新しいスタイルの住宅地として評判になった。London からも便利な郊外にあり、緑の中に住宅が点在する落ち着いたこの住宅地は、「郊外住宅の新商品」の肩書きを得ることになった (Creese, 1966 : pp. 87-107)。既存樹木を残しながら作られた道路やクウィーン・アン様式のコテッジが、それまでになかった変化に富むピクチャレスクな景観をもった独特の郊外住宅地 (写真4) を生み出すことになった (片木, 1987 : pp. 90-99)。こうした新たな住宅地開発は、ヴィクトリア朝ロンドンの特徴の一つであり、これこそ郊外住宅地のはじまりであったし (鈴木, 1996 : pp. 171-176)、この新たな郊外生活の原点ともいえる芸術的な郊外住宅地がベッドフォード・パークであり、最初のガーデン・サバークということができる (Bolsterli, 1977 : pp. 1-8 ; Greeves, 1983)。ただし、ここは中



図1 ベッドフォード・パークの位置 Location of Bedford Park

Reproduced from the Ordnance Survey 1:25,000 Explorer 173 (revised 1998) map with the permission of The Controller of Her Majesty's Stationery Office © Crown Copyright NC/99/350



写真4 ベッドフォード・パーク Bedford Park
(1999年7月13日, 橋詰 撮影)

流階級向けに開発された郊外住宅地で、労働者階級にとっては無縁の存在であった。

2. マートン・パーク (Merton Park)

マートン (Marton) 特別区のウィンブルドン (Wimbledon) の南約 1 km に位置する郊外住宅地マートン・パークを「オリジナル・ガーデン・サバーブ」と紹介したのは Woolfenden (1979) である。筆者の知る限りでは、おそらくこれがマートン・パークについて公式に触れた最初の研究であろう。最近、Goodman (1998) らによって新たに調査が実施されているが、一般に知られている近代都市計画の史的研究の中でこの住宅地に言及している例は見あたらない (注9)。Woolfenden (1979) によると、前述した最初のガーデン・サバーブと考えられているベッドフォード・パークよりも、マートン・パークはさらに5年前に建設されていることになる。

ヴィクトリア時代の実業家 J. インズ (John Innes) は、1867年に当時のサリー州のローワー・マートン (Lower Merton) の土地 5.3ha を購入した。彼は兄の James とロンドンのシティの一角を投機的に購入したが、彼は、ロンドンからさほど遠くない場所に彼自身の居宅を構え、さらにそこを住宅地として開発しようと考えた。当時、ロンドンに近いウィンブルドン駅周辺では、既に郊外住宅地の建設が開始されていたが、この一帯はまだ田園地帯で、その一角に教会を中心とする古い村があった。そこには2つの公共の建物、何軒かの古いレンガ造りの邸宅とフェアローン・ヴィラ (Fairlawn Villas) と呼ばれていた10戸あまりのセミ・デタッチド・ハウス (2戸建住宅)、そして1868年に建設されたウィンブルドンークロイドン (Wimbledon

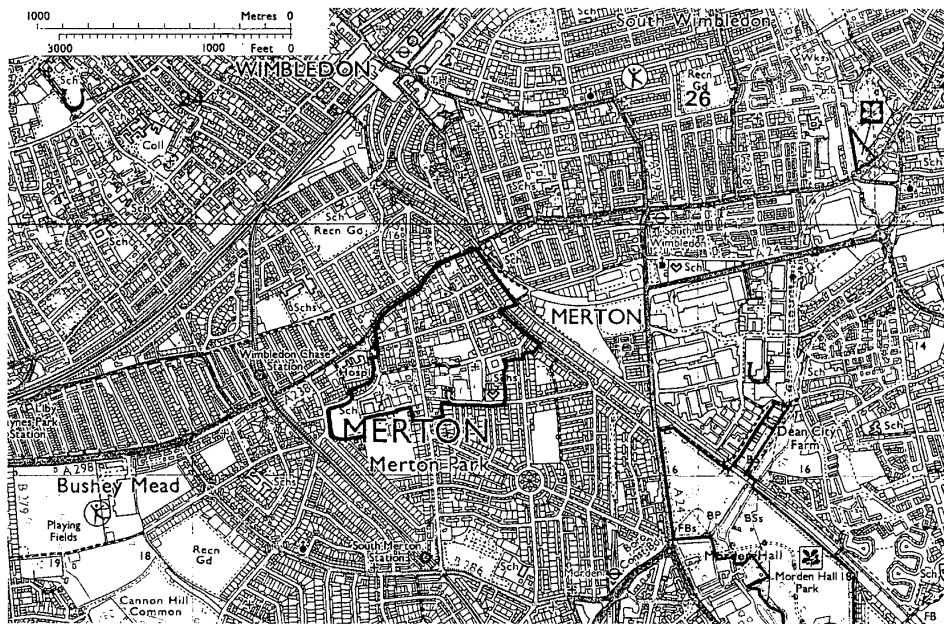


図2 マートン・パークの位置 Location of Merton Park

Reproduced from the Ordnance Survey 1:25,000 Explorer 161 (revised 1998) map with the permission of The Controller of Her Majesty's Stationery Office © Crown Copyright NC/99/350



写真5 マートン・パーク Merton Park (1999年10月27日, 橋詰 撮影)

-Croydon) 鉄道の駅があったにすぎなかった (図2)。

インズは、この土地のマナー・ファーム (Manor Farm) に移り住み邸宅の改修を開始した。1870年に、開発計画地内にドーセット (Dorset), モスティン (Mostyn), シェリダン

(Sheridan) の3つの直線道路が造成されると同時に、当時ウィンブルドンやその他のヴィクトリアン・サバーク (Victorian suburb) と同様の黄色みがかった頑丈なレンガとスレート葺きの屋根からなる最初の住宅が建設された。さらに1873年には、マートン・パーク・エステイト (Merton Park Estate Company) が設立され、本格的な住宅開発に乗り出した。しかし、他の郊外住宅地に比べて必ずしも鉄道の便に恵まれているとはいえ、また土地が平坦で景観的な変化に乏しかったことなどから、決してインズの期待どおりには開発は進展しなかった。さらに、当時人気を博していたクウィーン・アン様式の住宅などに比べるとその芸術性という点で今一つ人気を獲得できなかった。しかしここでは、開発に先立ってインズ自ら樹種を選択し行われた植栽によって独特の緑豊かな中流階級向けの郊外住宅地が誕生することとなった (Woolfenden, 1979 ; Goodman, 1998 ; 写真5)。

3. ブレンサム (Brentham)

ロンドン西郊のイーリング (Ealing) 周辺は、19世紀半ばまでは広大な田園地帯が広がっていた。1838年にロンドンのパディントン (Paddington) 駅から西に伸びる鉄道 Great Western Railway が敷設され駅が建設されると、この一帯にも都市化の波が及ぶようになった。1879年には路面電車 District Railway の運行も始まり、急速に開発が進んだ。一帯の農業は、その後の都市化による地価高騰によって1930年代には事実上姿を消すことになる。ロンドン周辺で急速に住宅の郊外化が進展し始めた1901年、ブレント川 (River Brent) の南の土地がブレンサム・ガーデン・エステイト (Brentham Garden Estate) によって宅地開発されることになった (図3)。この会社は、下院議員で特に労働者階級の住宅改善に関わっていた H. ヴィヴィアン (Henry Vivian) の優れた才能とアイデアによって設立されたものであった (Johnson, 1977 : pp. 4-11)。ヴィヴィアンは、一部の地主が開発利益を独占していた当時の社会への批判に立って、コ・パートナーシップ・ハウジング (Co-partnership housing) 方式、つまり協同出資型住宅方式 (「協同のハウジング」) による住宅地経営という新しい試み (注10) を誕生させたもので (西山, 1992 : pp. 116-126)、今日では、イーリング・ガーデン・サバーク (Ealing's Garden Suburb) とも呼ばれている。

1901年に最初にウッドフィールド・ロード (Woodfield Road) に面して9戸の住宅 (テラスハウス) が建設された。この住宅は「ヴィヴィアン・テラス」 (Vivian Terrace) と呼ばれた。次いで、ウッドフィールド・アベニュー (Woodfield Avenue) など周辺にも同様の形式のテラスハウスが建設され、その数は1905年までに50戸を数えた (Johnson, 1977 : pp. 4-11)。これら初期の住宅は、いわゆる「条例住宅」の形式に近いものであったが、彼は、確実な住宅地経営のためには、広いオープンスペースや十分な庭が確保された低密度の住環境の創出が必要だと考えていた。一方、ヴィヴィアンの「協同のハウジング」の理念に共鳴したアンウィン は、ここの住宅地開発の計画・設計を引き受けた。1907年には、新たに住宅用地が確保され

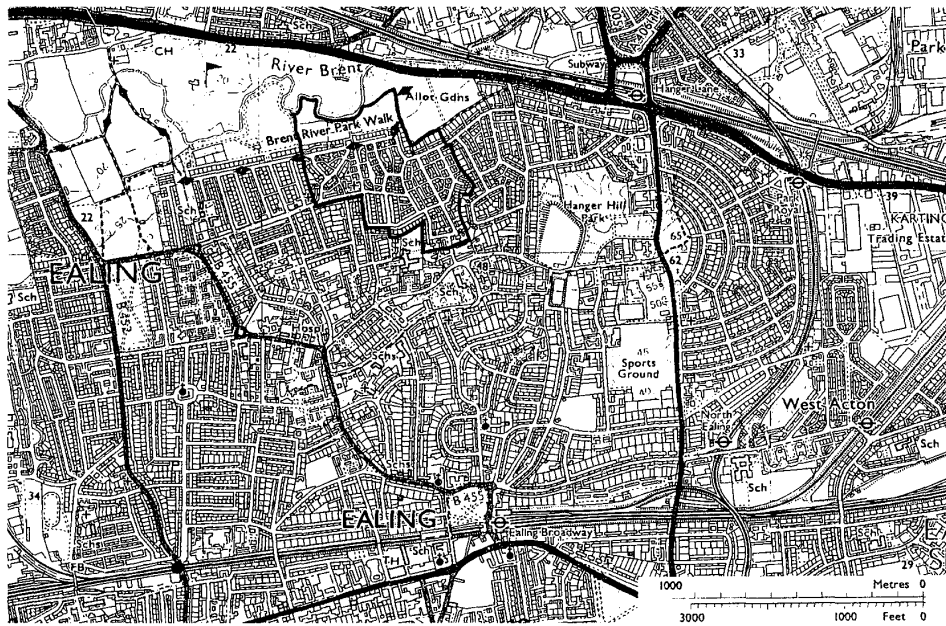


図3 ブレンサム的位置 Location of Brentham (Ealing's Garden Suburb)

Reproduced from the Ordnance Survey 1:25,000 Explorer 173 (revised 1998) map with the permission of The Controller of Her Majesty's Stationery Office © Crown Copyright NC/99/350



写真6 ブレンサム (イーリング・ガーデン・サバーク)

Brentham (Ealing's Garden Suburb) (1999年7月3日, 橋詰 撮影)

(全面積25.5ha), アンウィンによって住宅地計画が実施された(写真6)。アンウィンの計画では, 住宅地は大きく10つのヴィレジ・セルから構成されており, 各セル内にはアロットメン

ト・ガーデンが配置されている。また、中央付近の住宅地では、彼の計画理論をまとめた「実践の都市計画」(Unwin, 1909 : pp. 235-228)の中に描かれている三叉路も設計された(Miller, 1992 : pp. 46-48)。ブレンサムは、アンウィン独自の計画理論の実践の場であったと同時に、ニュー・イアーズウィックを初めとする彼の関わった計画の総括的住宅地でもあった(西山, 1992 : pp. 116-126 ; Skilleter, 1993 ; Hall and Ward, 1998 ; Hall, 1999)。

4. ハムステッド・ガーデン・サバーク (Hampstead Garden Suburb)

ロンドンのイースト・エンドの労働者階級のスラムにおいて慈善事業を行う傍ら、ナショナル・トラスト運動にも関心を持っていった牧師婦人のH. バーネット (Henrietta Barnett) は、緑豊かな環境に階級混住の住宅地を建設する夢を描いていた。当時彼女は、週末を広大な緑地ハムステッド・ヒース (Hampsted Heath) が広がるロンドン北西郊外の自然の豊かなハムステッドで過ごしていた。19世紀末にはロンドンの住宅地の郊外化はますます進展し、1896年にはこの地区への鉄道の延伸計画が発表された。彼女は、ヒース拡張委員会 (Hamstead Heath Extension Council) を設立し、ハムステッド・ヒースから北西に広がるヒース緑地 (Heath extension) を投機的開発から守るために5年間にわたり鉄道建設反対とヒース緑地の保全を訴えた。その結果、鉄道建設計画は中断され、ヒース緑地約32haが守られることになったが、この一帯の土地所有者であったイトン・カレッジ・エステイト (Eton College Estate) は、ヒース緑地周辺の住宅地開発を考えていた。そこで、彼女らはヒースの緑地の周りに労働者階級も住める階級混住の住宅地を建設すれば、地元の抱える住宅問題も解決できると考え、自らの手で周辺地区の開発構想を地元自治体に提案した。こうして98.4haの土地がハムステッド・ガーデン・サバーク用地として買い上げられることになった(図4)。実際の土地買収と測量、道路整備などは、既存条例の制約を受けないで事業を進める必要から、ハムステッド・ガーデン・サバーク法(1906年)が制定され、これによって同年、ハムステッド・ガーデン・サバーク・トラスト (Hampstead Garden Suburb Trust Ltd) が設立され本格的な業務が開始された。アンウィンは1906年にこの会社から、正式に建築家として任命されマスター・プランの作成や建築案の指導監督にあたった。個々の住宅建設は、1907年から1913年にかけて次々に設立されたハムステッド・テナンツ (Hampstead Tenants Ltd) など5つの協同出資型住宅会社によって進められた。これらの会社は、いずれもハムステッド・ガーデン・サバーク・トラストから土地を借り、この会社の基本方針、つまりアンウィンの構想にしたがって住宅地建設を行うことになった(片木, 1987 : pp. 242-278 ; 西山, 1992 : pp. 105-142 ; Hall, 1988 : pp. 94-108 ; Miller, 1992a)。

アンウィンのマスタープラン(1905年)では、ヒース緑地の北側の丘の上には教会、パブリック・ホール、図書館、インスティテュート等の公共施設をまとめたセンター地区が計画され、拡張ヒース緑地の北側は、1戸建住宅が、西側には独身女性用の住宅やコテージが計画された。

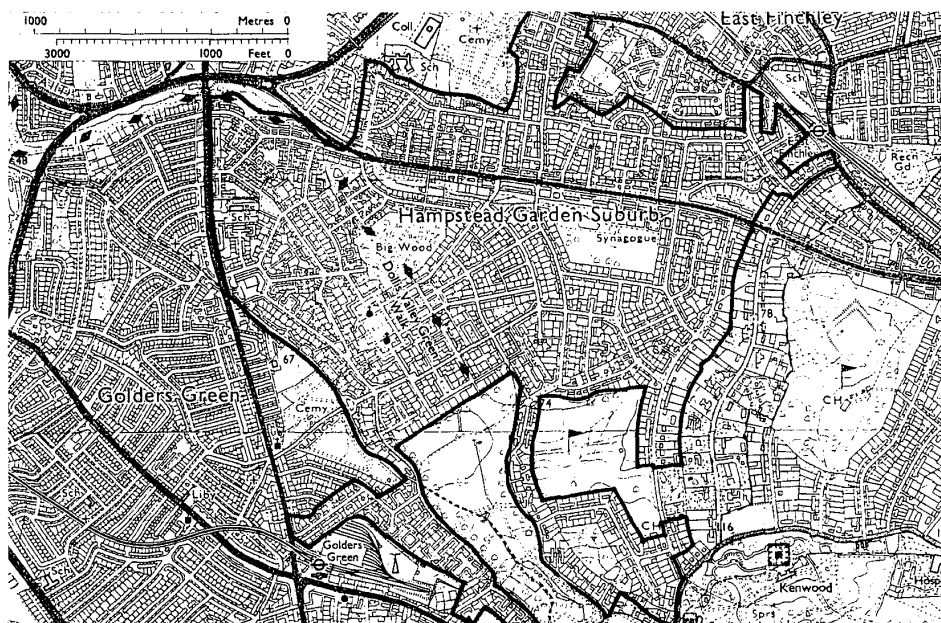


図4 ハムステッド・ガーデン・サバールの位置 Location of Hampstead Garden Suburb
 Reproduced from the Ordnance Survey 1:25,000 Explorer 173 (revised 1998) map with the permission of The Controller of Her Majesty's Stationery Office © Crown Copyright NC/99/350

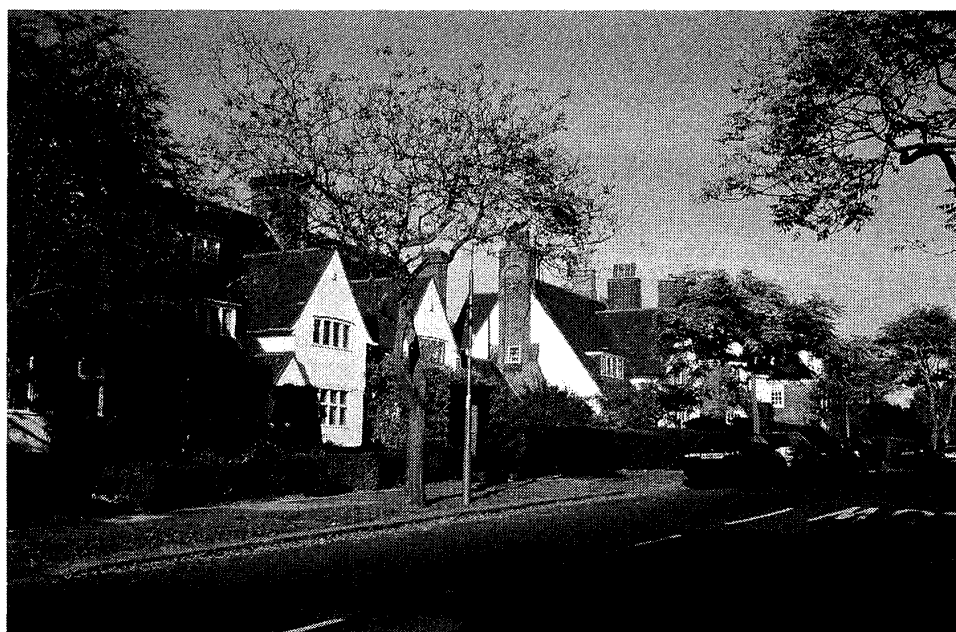


写真7 ハムステッド・ガーデン・サバール Hampstead Garden Suburb
 (1999年10月17日, 橋詰 撮影)

1908年にこのマスター・プランは改訂されている。アンウィンによるこのハムステッド・ガーデン・サバールの特徴は、レッチワースにおいてもそうだったように既存の樹木や自然の景観

を残すように住宅地を計画していること、彼の持論であった「1エーカーに12戸」という低密度の住宅地を目指したこと、住宅地は城壁とランドマークとしての教会の尖塔を有する中世都市のイメージを再現したこと、住宅地内にはニュー・イアーズウィックで用いたクル・ド・サックや小さな緑地を取り囲むように住宅を配するクアルトラングル (quadrangles) などの様々な手法が用いられているところにあり、これらが一体的に調和して落ち着いた住宅地を形成している (写真7)。バーネットらの努力によってハムステッド・ガーデン・サバーブの良好な環境は守られ、また住宅地建設では階級混住のための試みもされたが、実際にはレッチワースやベッドフォードパークと同様地価が高騰し、中流階級中心の住宅地となってしまったことでその夢は完全には実現しなかった (片木, 1987 : pp. 242-278 ; 西山, 1992 : pp. 105-142 ; Creese, 1966 : pp. 219-254 ; Miller, 1992b : pp. 78-103など)。

IV. ガーデン・ヴィレッジ, ガーデン・サバーブとは？ そして最初のガーデン・サバーブは？

そこで、これらガーデン・ヴィレッジとガーデン・サバーブに関する代表的事例の特徴を基にその概念を整理すると同時に、「最初のガーデン・サバーブは何処？」という議論に新たにその候補地の一つである Merton Park を加えて再検討してみる。

かつて Abercrombie (1910) は、ガーデン・ヴィレッジとガーデン・サバーブを明確に区分することは難しいとしているが、Culpin (1913) は、ガーデン・シティ、ガーデン・ヴィレッジ、ガーデン・サバーブの概念について次のように整理している。「ガーデン・シティとは、人口3万人程度で、都市の周囲は緑地帯で、住宅の周りは庭で囲まれ、工業・農業・住宅が総合的に計画された自立都市である。ガーデン・ヴィレッジとはボーンヴィルやポート・サンライトのように、いわばガーデン・シティのミニチュア版であるが上・下水道、電気などを母都市に依存する住宅地で、しばしば大企業の工場を伴うものである。ガーデン・サバーブとは、既存都市の健全な成長としての住宅開発によるものである」。特にレッチワースの建設後、ガーデン・シティは郊外住宅地と混同されることが多かった (Hall, 1992) が、これに対しハワードは、ガーデン・シティは自立都市であり、既存都市の拡張である郊外住宅地とは全く異なるものであると主張している (村上, 1996)。ガーデン・シティについては、これまでに多くの研究によってその意味や意義が明らかにされており、これ以上の言及を避けるが、ガーデンが何を意味し、ガーデン・ヴィレッジとガーデン・サバーブがどう違うのか、という点については明確にしておく必要がある。

まず、ハワードの田園都市論でいうガーデン・シティ (注11) のガーデンには田園地帯内に位置する都市という意味と、それ自体が大規模公園、市民農園、公園通りなどを配する庭園都市という両方の意味があるものと思われるが、必ずしも住宅地の具体的イメージは明確ではな

かったようだ。ガーデンの意味は、むしろ19世紀後半以降に起こった労働者の住環境改善運動やピクチャレスクな住宅開発などの文脈でとらえる必要がある。

当時、特に都市労働者の住宅環境は劣悪で、いわゆる「バック・ツー・バック」(back-to-back)と呼ばれる一般の労働者住宅では、オープン・スペースは確保されておらず、居住空間における衛生問題の解決が最大の課題となっていた。こうした状況を改善するために1875年、公衆衛生法(Public Health Act)が制定され、以降この規制に基づいて通風・採光、道路幅員、オープン・スペースなどがある程度確保されたいわゆる「条例住宅地」が建設されることになった。この「条例住宅地」は、激しい人口増加を背景に大都市郊外に広がっていったが、敷地間口6.0mで敷地奥行16.7m(敷地面積約100m²)の規格で道路沿いにびっしりと立ち並ぶ「条例住宅地」は、変化に乏しく、快適性に欠けるものであった(片木, 1987: pp. 136-140; 西山, 1992: pp. 24-27)。これに対して、ガーデン・ヴィレッジやガーデン・シティを初めとする住宅地において目指した住環境改善運動は、当時の労働者住宅地になかった公共のオープン・スペースや個人菜園などに利用可能な庭の空間が確保された住宅地を建設するという目的を持つと同時に、個人の庭は確保されてはいるが狭小で画一的な「条例住宅地」にはなかった芸術的でピクチャレスクな変化を住宅に求めたものといえる。

1. ガーデン・ヴィレッジとガーデン・サバーク

ハウードの田園都市論も最初のガーデン・シティとなったレッチワースも、19世紀に工場経営者によって建設されたソルテアやボーンヴィルあるいはポート・サンライトなどの工業村をぬきにしては語れない(石田, 1991)。この工業村の中でも、特にボーンヴィルやポート・サンライトなどのように、19世紀に博愛主義的な産業資本家によって、従業員用に建設された住宅地は、当時の一般の労働者住宅地に比べ優れた住環境を有する住宅地であった。もちろん、この住宅地は低密度で十分な広さの公共オープン・スペースと個人の庭が確保され、かつ美しく個性的な田園風コテージによって構成されているばかりでなく、公共施設なども備えられていた。ガーデン・ヴィレッジは、このような空間的・景観的・社会的まとまりをもった住宅地ということになる。

しかし、仮にガーデン・ヴィレッジを従業員など特定の人々に対する住宅地とするなら何も工業村に限るものではない。例えば、これらの事例よりも古い1810年頃、クエーカー教徒の大地主が建設したブリストル(Bristol)北西郊のブレイズ・ハムレット(Blaise Hamlet; 注8)のように、自分の荘園で働く小作人や召使いの引退後の生活のために作った小さな村(片木, 1987: pp. 44-48; 高橋, 1996: pp. 188-192)などのようなケースもガーデン・ヴィレッジといえるのかも知れない。その意味では、1918年に第一次大戦の軍需飛行機工場の従業員のためにロンドンのブレント(Brent)区内に建設されたロウ・グリーン・ヴィレッジ(Row Green Village)などの住宅地もガーデン・ヴィレッジの一つとして分類することが可能であ

る。つまり、狭義のガーデン・ヴィレッジとは、特定の集団の人々のために建設された住環境のアメニティに恵まれた田園風コテージからなる村落共同体的な住宅地ということができる。また、イギリス初の本格的なガーデン・ヴィレッジはボーンヴィル・ヴィレッジである、といっても差し支えなからう。

これに対して、ガーデン・サバークは文字通り解釈すると、都市の郊外（サバーク）に、都市の成長に伴う過剰人口を収容するために開発された十分なオープンスペースや個人の庭のスペースが確保された郊外住宅地ということになる。では、19世紀以降例えば、ロンドン郊外において開発された緑豊かな住宅地は、すべてガーデン・サバークといえるだろうか。この点については、解釈が分かれるところでもあるが、Dyos (1961) は、19世紀のロンドンの郊外化をヴィクトリアン・サバーク (Victorian Suburb) と呼んだ。さらに、ガーデン・サバークの名が初めて使われたのが1907年に建設が開始されたハムステッド・ガーデン・サバークであるということも含めて慎重に検討する必要がある。つまり、ガーデン・サバークの意味するところは、住宅地の外観に留まらず、開発理念や開発手法など住宅地開発の背後の意味を含めて考える必要がある。

もちろん、ガーデン・サバークは、都市の拡大によって新たに建設された郊外住宅地であり、ガーデン・ヴィレッジと同様、低密度で緑豊かな住環境に恵まれた住宅地（注12）であるという点については異論はないだろう。むしろ重要なのは、田園都市論に基づくレッチワースと、その延長線上で計画されたハムステッド・ガーデン・サバークなどが博愛主義的な住環境改善主義者（注13）らによるガーデン・ヴィレッジをモデルに建設された（Sutcliffe, 1981 : pp. 39-40）という点にある。慈善家バーネットの描いた「混住社会」の実現という夢と、建築家アンウィンが描いた「アメニティ」あふれる住宅地の建設の夢に、自由主義者ヴィヴィアンの描いた「協同のハウジング」の夢が重なってハムステッド・ガーデン・サバークの実現をみた（西山, 1992 : pp. 105-106）のはその好例である。つまりガーデン・サバークは、Hall (1999) も指摘するように、博愛主義的な労働者の住環境改善運動や開発利益の地域還元を目指した協同出資型の開発手法などに基づく緑豊かな郊外住宅地ということができないだろうか。では、ベッドフォード・パークやマートン・パークもガーデン・サバークの範疇に入る住宅地であろうか。この点については、「最初のガーデン・サバークは何処？」という次の議論でさらに検討する。

2. 最初のガーデン・サバークは？

19世紀後半以降、急激な都市化に伴う郊外住宅地の開発が盛んに行われた結果、公式・非公式にガーデン・サバークと呼ばれている住宅地が少なからず存在する。ここでは、ガーデン・サバークの起源をどこに求めるかという点について再検討してみる。

かつて、石井 (1977) は、ベッドフォード・パークについて、「ここは “First Garden

Suburb”で、東京の田園調布などにみられる、昭和初期の私鉄沿線の郊外住宅地の原型である」と、紹介した。確かに、ベッドフォード・パークのセント・ミカエル教会（St. Michaels Church）には、この郊外住宅地開発を行ったジョナサン・カーの記念碑文があり、そこには「1875年、最初のガーデン・サバーク、ベッドフォード・パークの創設者」と刻まれている。これは、W. モリス（William Morris）の教えによるものであるが（Johnson, 1977）、地元ベッドフォード・パーク協会でも Greeves（1983）の研究などを通して、この点を以前から主張している。また、片木（1987）はベッドフォード・パークを郊外住宅地開発の原点とし、鈴木（1996）は理想的郊外住宅地の先駆であるとしている。

しかし、このベッドフォード・パークよりもさらに古いガーデン・サバークと考えられている郊外住宅地が存在することがわかった。それが1970年に開発が開始されたマートン・パークである。Woolfenden（1979）は、この住宅地を「オリジナル・ガーデン・サバーク」として紹介している。ジョン・インズによって開発された緑豊かなこの郊外住宅地は、もちろん、鉄道駅周辺の開発の一つではあるが、郊外住宅地としては決してロンドンへのアクセスに恵まれているとはいえなかったばかりか、当時人気となったクウィーン・アン様式のピクチャレスクな住宅と比べて今一つ人気が出ず、開発には長い時間を要したという（Goodman, 1998）。では、どちらが最初のガーデン・サバークであろうか。

開発開始時期で単純に比較すると、マートン・パークが最初のガーデン・サバークということになる。しかし、知名度からベッドフォード・パークを最初のガーデン・サバークと見なすという考え方もあるかも知れない。これらの郊外住宅地の立地上の特色をロンドンの中心地であるセント・ポール寺院（St. Paul's Cathedral）から住宅地の中心までの直線距離で比較すると、ハムステッド・ガーデン・サバークが最も近く北西約5.4kmに位置し、次いでベッドフォード・パーク（西約5.8km）、マートン・パーク（南西約7.1km）で、ブレンサムが西約7.7kmと最も離れている。しかし、必ずしもこれら住宅地の開発時期と都心からの距離の間には、都心に近いほど早く開発されたという相関関係は認められない。これは、郊外住宅地開発が鉄道網の発達に対応して行われたことによるものであろう。

この「最初のガーデン・サバークは何処？」という点について、Hall（1999）は、「TCPA（イギリスの都市農村計画協会）の会員の多くは、ハムステッドと考えるだろうし、中にはベッドフォード・パークと答えるこの分野に明るい会員もいるだろうが、いずれも正しくない。正しくはブレンサムにその肩書きを求めるべきだ」と述べている。ただし、彼はマートン・パークをその議論の対象に加えていない。ハムステッド・ガーデン・サバークでは1907年、ブレンサムでは1901年に住宅建設が開始されている。したがって、住宅建設年代順に住宅地を並べると、マートン・パーク（1870年）、ベッドフォード・パーク（1875年）、ブレンサム（1901年）、ハムステッド・ガーデン・サバーク（1907年）となる。しかし、Johnson（1977: pp. 6-7）や Hall（1999）はベッドフォード・パークは確かに古いが投機的住宅開発で、しかも労働者

階級の住宅問題といった社会的視点を持たなかったという点で、ガーデン・サバーブと呼ぶのはふさわしくないとしている。それに対し、ブレンサムは、ハムステッド・ガーデン・サバーブにおいて拡大ヒース緑地を保全したのと同様、ブレント川低地の緑地が保全された点や、住宅にはW. モリス (William Morris) などによるアーツ・アンド・クラフト運動 (Art and Craft movement) の影響や伝統的な地方色を活かしたネオ・バナキュラー (neo-vernacular) の手法が活かされていることなどガーデン・サバーブの特色を有しているとしている。ただし、ブレンサムの住宅地がこうした特色を持つようになるのは、レッチワースやハムステッドなどの開発を手がけたアンウィンとパーカーによって開発計画が作成された1911年以降のことである。

ブレンサムの場合1901年に建設された住宅は、いわゆる「条例住宅地」の域を出ないものであったが、ヴィヴィアンによって考案された協同出資型の住宅開発は、後にレッチワースやハムステッド・ガーデン・サバーブの開発方式の原点ともなったユニークなものであった。したがって、こうしたガーデン・サバーブの開発理念を重視する考え方も大切であろう。その意味では、マンチェスター (Manchester) 郊外において同様の開発方式を採用したバーナジ・ガーデン・ヴィレッジ (Burnage Garden Village) などの郊外住宅地 (Sutcliffe, 1981 : pp. 123-132) もガーデン・サバーブといえることができる。

19世紀後半の投機的住宅地は、ベッドフォード・パークの例からもわかるように、それまでになかった個性的でピクチャレスクな住宅によって構成されていたが、それはおもに中流階級向けの住宅地であった。これに対し、当初ブレンサムやハムステッド・ガーデン・サバーブで試みられた開発は、労働者階級の住宅改善あるいは階級混住を実現したいという理想に基づく住宅地開発であった。また、郊外住宅地にガーデンという言葉が当てられるようになったのは、ハワードの田園都市運動以降のものであろうし、特にガーデン・サバーブは、レッチワースやハムステッド・ガーデン・サバーブ建設を境に盛んに利用されるようになった用語である。こうした観点に立つと、ミニ・ハムステッドともいえる (Hall and Ward, 1998 : pp. 41-42)、このブレンサム (Ealing's Garden Suburb と呼ばれる) が最初のガーデン・サバーブということになり、Hall (1999) の主張は妥当なものであるといえる。

では、ベッドフォード・パークは、どう解釈すればよいのか。Jahn (1982) は、19世紀後半におけるロンドン西郊のベッドフォード・パークなどは、鉄道の整備に支えられて特に中流階級の郊外住宅地として開発されたとしている。この点について Hall (1992 ; 1996) は、ベッドフォード・パークや1850年代に開発されたイズリントン (Islington) のハイバリー・ニュー・パーク (Highbury New Park) や1880年代にイーリングで開発されたウッド・エステイト (Wood Estate) などのような特に19世紀後半の鉄道網の発達に伴って鉄道の駅前を中心に開発された郊外住宅地は、その立地上の特色からヴィクトリアン・レイルウェイ・サバーブ (Victorian Railway Suburb) として分類すべきであるとしている。これをマートンパーク

に当てはめるならば、住宅開発がベッドフォード・パークと同じように投機的であったこと、多少不便ではあったが鉄道沿線の郊外開発の一つといえることから、やはりヴィクトリアン・レイルウェイ・サバーブということになり、「オリジナル・ガーデン・サバーブ」の呼称は必ずしも適当ではないということになる。さらに、ヴィクトリアン・レイルウェイ・サバーブは、Dyos (1961) によってヴィクトリアン・サバーブと呼ばれた郊外住宅地の典型的なものといえないだろうか。

その意味では、ガーデン・サバーブの建設理念に基づいて開発された住宅地は意外に少なく、後にガーデン・サバーブの名で開発・販売された投機的住宅地の多くは、広義のガーデン・サバーブではあっても、その本質において本来のガーデン・サバーブとは異なるものとみなされる。以上のことから、ガーデン・サバーブとは、基本的に博愛主義に根ざした労働者の住環境改善運動や協同出資型の住宅開発手法などによる緑豊かな郊外住宅地であって、ブレンサムがその最初の開発であり、それ以前に鉄道沿線に開発された郊外住宅地は、Hall (1996) の指摘のようにヴィクトリアン・レイルウェイ・サバーブとして整理することが適当と考えられる。

V. おわりに

本稿は、イングランドにおけるガーデン・ヴィレッジとガーデン・サバーブに関する事例を基にその住宅地の意味するところを整理すると同時に、「最初のガーデン・サバーブは何処？」という議論に、新たに候補地を加えて再検討したもので、以下のような点が明らかになった。

狭義のガーデン・ヴィレッジは、特定の集団の人々のために建設された住環境に恵まれた田園風コテージからなる村落共同体的な住宅地であり、ガーデン・サバーブは、階級混住の理想に基づく住宅地開発の理念や開発利益の地域還元を目指した協同出資型の開発手法などによる緑豊かな郊外住宅地ということができよう。ガーデン・ヴィレッジは産業資本家の博愛主義に基づく労働者の住環境改善運動がその原点となっており、特に、ボーンヴィルやポート・サンライトなどの開発理念や開発手法が田園都市構想やレッチワース、ハムステッド・ガーデン・サバーブなどの開発に少なからず影響したことは注目される。また、イギリス最初の本格的なガーデン・ヴィレッジはボーンヴィルであり、最初のガーデン・サバーブはブレンサムといえることができる。19世紀後期の投機的郊外住宅地であるベッドフォード・パークもマートン・パークも、鉄道依存型の中流階級向け郊外住宅地という意味でヴィクトリアン・レイルウェイ・サバーブとして整理することが適当であろう。

本稿ではサバービアやヴィクトリアン・サバーブといった概念との関係について十分な検討ができなかったし、ここでの分類や概念規定は、一つの試論の域を出ないものであると認識している。これらは、今後の検討課題である。なお、ここにあげたガーデン・ヴィレッジとガーデン・サバーブの事例は、現在すべて歴史的景観保全地域 (Conservation Area) に指定され、

ほとんど建設当時のままの景観が守られているばかりか、今日でも人気の高い住宅地となっている点には学ぶべきものがある。

本研究は、1999年4月から1年間、University College London 地理学科に駒澤大学在外研究員として在籍した際に得られた資料・文献と若干の現地調査（1999年12月までに得られた成果）を基にまとめたものである。なお、本稿を作成するにあたり、同 University College London 地理学科のリチャード・デニス（Dr. Richard Dennis）博士、都市計画学科のピーター・ホール（Sir Peter Hall）教授からは貴重なアドバイスをいただいた。記してお礼申し上げる。

注

(注1) E. ハワード (Ebenezer Howard : 1850-1928) は、1898年に *To-morrow: A Peaceful Path to Real Reform*. (「明日－真の改革への平和な道」) を出版した。1902年には *Garden Cities of To-morrow* (「明日の田園都市」) とタイトルを変えて再版されたことは広く知られている。E. ハワードの田園都市論 (初版) から100年にあたり、アメリカ合衆国の都市計画学会誌 *Journal of the American Planning Association* では、1998年春に Ebenezer Howard and the Garden City という特集を、イギリスの都市計画協会の機関誌 *Town & Country Planning* では、1998年秋に One Hundred Years of To-Morrow という特集号を発刊した。日本でも同様の特集が日本地域開発センターの機関誌「地域開発」(1999年) などで組まれた。

(注2) E. ハワードの田園都市計画思想及びガーデン・シティについては、Purdom (1963) や Miller (1989) がその代表的研究であるが、その他に Creese (1966) ; Hall (1988) ; Hall and Ward (1998) にも詳しい。また、日本でも西山 (1992) ; 村上 (1996) ; 齋木 (1998) ; 石川 (1999) らによる研究例がある。

(注3) タイタス・ソルト (Titus Salt : 1803-76) は、毛織物工業の中心地ブラッドフォードにおいてアルパカ・ウールの繊維化に成功し財を築いた。ソルトは1851-76年にかけて工場と工場労働者のための村を建設し、1848-49年には、ブラッドフォード市長を務めている (石田, 1991)。

(注4) キャドバリー兄弟によって事業が拡大されたチョコレート企業キャドバリーは、Cadbury's の商標でチョコレートやココアを製造し、世界にその名を知られるようになった。

(注5) 石鹼「サンライト」の製造で大成功したりーヴァ・ブラザーズの名は、知られていなくても、その代表的製品である石鹼「Lax」や洗剤「Surf」は、今日広く世界に知られている。

(注6) R. アンウィン (Raymond Unwin: 1863-1940) は、1902年に B. パーカー (Barry Parker: 1867-1947) とともにニュー・イアーズウィックを設計、その後1904年には彼らは田園都市レッチワースの全体計画を手がけ、1905年には R. アンウィンは、ハムステッド・ガーデン・サバーク、さらに1907年には、ブレンサム・ガーデン・サバークの設計にあった。1909年には「実践の都市計画」(Unwin, 1909) を出版している (西山, 1992 : pp. 107-116 ; Miller, 1992b)。

(注7) ラウントリーのチョコレート工場は、今日の Nestle 工場である。キャドバリーは、このラウントリーの徒弟としてチョコレートの製造技術を習ったが、ニュー・イアーズウィックの村づくりでは逆にラウントリーがキャドバリーから工業村の建設、運営に関するノウハウを教えられたという (高橋, 1996 : pp. 208-212)。

(注8) ロンドンの郊外化の始まりは、例えば次のような例があげられる。ロンドンの西側にあたる

ホランド・パーク (Holland Park) を中心とする一角のホランド・パーク・エステート (Holland Park Estate) もそうした開発 (1824年) の例である (鈴木, 1996 : pp. 164-170)。同じ頃, ブレイズ・ハムレット (Blaise Hamlet) を設計した建築家 J. ナッシュ (John Nash) によって, リージェント・パーク (Regent Park) とリージェント・ストリート (Regent Street) に沿った地域が設計され幾つかのテラスハウスやヴィラ群が開発された。特にリージェント・パーク北東端のヴィラ群 (1823-28年) は, パーク・ヴィレッジ・イースト (Park Village East) とウェスト (Park Village West) と呼ばれ, 文字どおり村として計画されている (片木, 1987 : pp. 45-53)。ただし, これらの住宅地は, 中流階級の住宅地として人気を博したが, いわゆる郊外住宅地として扱われることは少ない。

(注9) 田園都市運動に伴う郊外住宅地に関する事例が数多く取り上げられている Abercrombie (1910) や Culpin (1913) や, ヴィクトリア期の郊外住宅にも言及している Creese (1966) や Hall (1996) などの研究にもこのマートン・パークは紹介されていない。

(注10) 「協同のハウジング」の仕組みは, まず, 労働者住宅を建設するために協同出資型の会社を設立し, 転換社債と株を発行する。住宅を借りたい人と, 慈善的な投資を目的とする人が共に出資し, この会社の運営資金は公的機関からの借入金と家賃によって賄われる。会社はこの資金を利用して住宅地の開発・整備と維持管理を行い, 借入金の返済などを差し引いた利益は, 借家人に家賃に応じて株で配当することで, 開発利益の住民への還元を目指したものである。この方式は会社, 借家人, 投資家の三者に確実な利益をもたらすという点で画期的なアイデアであった。ヴィヴィアンは, 住み手と慈善的な投資家の「協同」によって「開発利益の分配」を目指した (西山, 1992 : pp. 116-126)。彼が編み出したこの方式の背景となったのは, 生活協同組合運動で, 1888年に生活協同組合のメンバーであったE. ネアール (Edward Neale) らによって設立された Tenant Co-operators Ltd. がそれであった (Johnson, 1977)。

(注11) ガーデン・シティという名前も新しいものではなかった。ハワードがシカゴに滞在していた頃, シカゴはガーデン・シティと呼ばれていたし, 1871年の大火によるシカゴの再開発や郊外に新たに建設されたガーデン・サバークを彼は目の当たりにしている (Creese, 1966 : pp. 144-157 ; Hall, 1988 : pp. 88-91)。また, 1869年にはニューヨーク郊外のロング・アイランドにガーデン・シティという名の町が建設されている (片木, 1987 : pp. 194-198)。

(注12) アンウィンは「過密によって得られるものは何もない」として30戸/ha (12戸/エーカー) の住宅密度を提唱した (Hall and Ward, 1998)。この計画理念によって, レッチワースやハムステッド・ガーデン・サバークさらにブレンサムなどでは建蔽率が低く押さえられ, 低層・低密度の緑豊かな住宅地を誕生させることとなった。

(注13) 高橋 (1996 : pp. 208-210) は, ボーンヴィルのキャドバリーやニュー・イアーズウィックのラウントリーはクエーカー教徒で, 労働者の待遇改善や労働者の村づくりに熱心だったが, それは彼らの徹底的な平和主義によるものであるとしている。

文 献

- 石井 弘 (1977) : 英国の公園緑地事情 ー私の生活体験からー. 道路と自然, 16, 13-21.
石川幹子 (1999) : ハワードの田園都市論の今日的意義. 新都市, 625, 22-31.
石田頼房 (1991) : 19世紀イギリスの工業村 ー田園都市理論の先駆け・実験場としての工業村 : 三つの典型例ー. 総合都市研究, 42, 121-149.
片木 篤 (1987) : 「イギリスの郊外住宅ー中流階級のユートピアー」住まいの図書館出版局, 317p.

- 齋木崇人 (1998) : 最初の田園都市・レッチワース. 造景, 16, 140-167.
- 鈴木博之 (1996) : 「ロンドンー地主と都市デザイナー」 筑摩書房, 206p.
- 高橋哲雄 (1996) : 「イギリス歴史の旅」 朝日新聞社, 266p.
- 西山康雄 (1992) : 「アンウィンの住宅地計画を読む ー成熟社会の住環境を求めてー」 彰国社, 234p.
- 村上暁信 (1996) : ハワード「田園都市論」における都市農村計画思想. 1996年度第31回日本都市計画学会学術研究論文集, 115-120.
- Abercrombie P. (1910): Modern Town Planning in England. A Comparative Review of "Garden City" Schemes in England. *Town Planning Review*, 1 (1), 18-38., Part II.1 (2), 111-128.
- Bolsterli M.J. (1977): *The Early Community at Bedford Park "Corporate Happiness" in the First Garden Suburb*. Routledge & Kegan Pall, London, 136p.
- Bournville Village Trust (1995): *The Bournville Story. Housing People for 100 Years*. 7p.
- Cherry G. E. (1988): *Cities and Plans. The Shaping of Urban Britain in the Nineteenth and Twentieth Centuries*. Edward Arnold, London, 210p.
- Creese W. (1966): *The Search for Environment. The Garden City: Before and After*. (1992:Expanded Edition), The John Hopkins University Press, Baltimore, 390p.
- Culpin E. (1913): *Garden City Movement Up-To-Date*. The Garden Cities and Town Planning Association, 82p.
- Dyos H. J. (1961) : *Victorian Suburb. A Study of the Growth of Camberwell*. (1973 : Third impression), Leicester University Press, 240p.
- Ebenezer H. (1902): *Garden Cities of To-morrow*. (1985:Reprinted Edition), Attic Books, Wales, 125p. 長素連訳 (1968) : 「明日の田園都市」 鹿島出版会, 195p.
- Goodman J.ed. (1998): *John Innes and the Birth of Merton Park 1865-1904*. The John Innes Society, 52p.
- Greeves T. A. (1983): *Guide to Bedford Park "The First Garden Suburb" in the Form of Two Walks*. The Bedford Park Society, 24p.
- Hall P. (1988): *City of Tomorrow. An Intellectual History of Urban Planning and Design in the Twentieth Century*. (1996:Updated Edition), Blackwell, Oxford, 502p.
- Hall P. (1992): East Thames Corridor: The Second Golden Age of the Garden Suburb. *Urban Design Quarterly*, 43, 2-9.
- Hall P. (1996): Ealing, The Queen of London's Victorian Railway Suburbs. *Urban Design Studies*, 2, 31-44.
- Hall P. and Ward C. (1998): *Sociable Cities, The Legacy of Ebenezer Howard*. John Wiley & Sons, Chichester, 229p.
- Hall P. (1999): Brentham-London's forgotten garden suburb. *Town & Country Planning*, 68 (6), 180-181.
- Henslowe P. (1984): *Ninety Years on: An Account of the Bournville Village Trust*. Bournville Village Trust, 26p.
- Hubbard E. and Shippobottom M. (1988): *A Guide to Port Sunlight Village*. Liverpool University Press, Liverpool, 70p.
- Jahn M. (1982) : Suburban Development in Outer West London 1850-1900. Thompson F.M.L. (ed.) : *The Rise Suburbia*. Leicester University Press. (274p), 94-156.
- Johnson B. (1977): *Brentham Ealing's Garden Suburb*. Brentham Society, 24p.
- Miller M. (1989): *Letchworth The First Garden City*. Phillimore, Sussex, 244p.

- Miller M. (1992a): The Saga of the 'Suburb Salubrious' *Planning. History*, 14-(3), 4-12.
- Miller M. (1992b): *Raymond Unwin: Garden Cities and Town Planning*, Leicester University Press, Leicester, 299p.
- Purdom C.B. (1963): *The Letchworth Achievement*. J.M. Dent & Sons, London, 150p.
- Skilleter K. (1993): The Role of Public Utility Societies in Early British town Planning and Housing reform, 1901-36. *Planning Perspective*, 8, 125-165.
- Sutcliffe A.ed. (1981): *British Town Planning: the Formative Years*. Leicester University Press, 211p.
- Unwin R. (1909): *Town Planning in Practice. An Introduction to the Art of Designing Cities and Suburbs* (1932:Eighth Impression), Ernest Benn Limited, London, 416p.
- Waddilove L.E. (1954): *One Man's Vision, The Story of the Joseph Rowntree Village Trust*. George Allen and Unwin, London, 149p.
- Woolfenden A. (1979): *Merton Park — The Original Garden Suburb*. The John Innes Society, 15p.

Garden Villages and Garden Suburbs in England

Naomichi Hashizume*

The purpose of this study was to make clear the characteristics of garden villages and garden suburbs in England. Also, in this paper I discussed the question of the location of the first Garden Suburb. The results obtained from these studies are summarised as follows.

The 'garden city' idea has many unique features that continue to be relevant today, not only in England, but also throughout the world. Bournville Village, Port Sunlight Village and New Earswick are traditionally known as industrial villages, but we can also say that they are garden villages. The original concept behind the villages was to provide a good living environment for all the people of the working class according to the founder's philanthropic tradition. It is an important fact that the garden villages were particularly responsible for the articulation of many important ideas to the garden city concept.

The prime purpose of the garden suburb was to solve the problem of housing for the working class. The aims of the Co-Partnership Tenants Society were to construct housing for a socially mixed community in the garden suburb. Their incorporation of green open space and a site layout, which included adequate garden space and picturesque cottages, was a precursor of the garden suburb style of planning.

Bedford Park (Acton) has started in 1875 and nowadays claims the title of 'the first garden suburb' (Bolsterli, 1977 and Greeves, 1983), and Merton Park (Wimbledon) begun in 1870, claims the title of 'the original garden suburb' (Woolfenden, 1979). Brentham, started in 1901, and Hampstead Garden Suburb, started in 1907, had been designed by Parker and Unwin as architect-planners under the garden suburb concept. Ealing Tenants Limited, the pioneer Co-Partnership organisation, was registered in 1901 to develop a site at Brentham on the northern outskirts of Ealing, west of London. However, Bedford Park and Merton Park were speculative development, which lacked any real social aim in its foundations therefore, the garden suburb concept had not yet emerged at the end of the 19th centuries.

In this sense, Brentham is 'Ealing's Garden Suburb' with origins in the Co-Partnership movement as a garden suburb, and it is understood to be the first garden suburb in England. And we can say that Bedford Park or Merton Park is one of the Victorian Railway Suburbs (Hall, 1996), which means they rely on a railway station to take commuters from suburb to the city centre.

This paper is the result of a study that I have been conducting as a visiting researcher in the Department of Geography, University College London (April 1999 to March 2000). The author would like to express thanks to Sir Professor Peter Hall and Dr. Richard Dennis, University College London, for their great help in the survey.

* Department of Geography, Komazawa University, Tokyo